



ろうさい病院つうしん

発行所:中部ろうさい病院

〒455-8530 名古屋市港区港明1-10-6
<http://www.chubuh.rofuku.go.jp/>

TEL: 052-652-5511
FAX: 052-653-3533

病院機能評価受審に向けて



中部ろうさい病院副院長 小林 建仁

中部ろうさい病院は2010年秋に日本医療機能評価機構による2回目の病院機能評価を受審します。

評価される項目として、病院組織の運営と地域における役割、患者の権利と医療の質および安全の確保、医療の質と安全のためのケアプロセス、療養環境と患者サービスの向上等々多くのものがあります。これらの項目は医療を取り巻く環境の変化や制度改革を受け、ますます複雑、多岐にわたったものとなってきております。前回の受審時には、増改築を繰り返していた病棟の建築上の制約により、療養環境やプライバシーの保護といった面での患者サービスは満足いくものではありませんでした。しかし今回新病院は完成し、その景観は名古屋市の都市景観賞を受賞するという現代的な病院になりました。少なくとも器の問題に関しては十分であろうと思っています。問題は私たちがこの立派な建物をいかに有効に活用して、質の高い安全な医療を地域の皆さまに提供できるかにかかっていると思います。

多くの評価項目の中で先生方と関係の深い、地域における役割と連携について考えてみたいと思います。

評価項目【Ⅰ】地域連携のために院内の体制が整備されているか？

自己評価 a

◇地域連携のために独立した部門（地域医療

連携室）が設置されている。

◇担当者（連携係長）、MSWが配置され、必要な情報が一元管理されている。

◇紹介元、紹介先などの連携実績が集計されている。

評価項目【Ⅱ】地域における連携機能が発揮されているか？

自己評価 a

◇病院の役割・機能に応じた紹介患者を受け入れている。

◇紹介元が把握され迅速な返答と的確な情報提供を行っている。

評価項目【Ⅲ】地域への情報発信が適切に行われているか？

自己評価 b

◇ホームページが作成され、ろうさい病院通信などの広報誌を発行している。

◇診療実績については十分な広報がなされていない。

評価項目【Ⅲ】のようにまだ対応しきれていない部分もありますが、現在改善に取り組んでいます。

今回の病院機能評価受審を契機に、当院の医療全般を改めて見直し、更に質の高い病院となるべく努力をしていく決意であります。今後とも先生方の温かくも厳しいご指導、ご鞭撻を賜わりますようお願い申し上げます。

着任のご挨拶

心臓血管外科 部長代理 徳田 順之



平成21年8月1日付けで着任いたしました徳田順之(とくだ よしゆき)と申します。皆さまにはこれからもお世話になる事と存じますが宜しくお願い申し上げます。まだ勤め始めて日は経っていませんが、私は中部ろうさい病院のキャンパスの、新しく機能的な中にも優しく緑溢れる感じがとても気に入っています。これは治療を受ける患者さんの側だけでなく治療に携わる職員にとっても、癒しあるいは安らぎを受けることができる恵まれた環境空間と感じています。

私の専門分野は外科の中でも心臓及び血管の手術治療で、一般に心臓血管外科あるいは循環器外科と呼ばれる分野です。日進月歩の医学の中でも比較的新しい分野であり、日常診療の上でも様々な未解決の問題に直面することは多いのですが、それも裏を返せば創意工夫の余地があり、研究のしがいのある領域といえます。心臓手術に使用される体外循環(人工心肺)は戦後1950年代に実験開発が行なわれ、弁膜症の弁置換術に用いられる人工弁は1960年代になって開発され、心臓を安全に停止させる心停止手段(心筋保護法)は1970年代に実用化されたばかりです。これらは全て今日では手術に日常的に用いられているものばかりですが、初期には様々な問題があり、現在それらを安全に用いることができることの恩恵は、過去に於ける先人の努力の汗と、それを受けられた患者・家族の涙の結晶によるものといえます。私が心臓血管外科の修練を始めた後でも、いくつかの大きな技術革新が起りました。具体的には、僧帽弁閉鎖不全に対する僧帽弁形成術の技術進歩、体

外循環を用いない冠動脈バイパス(off pump CABG)に使用する器具の進歩、胸部大動脈の手術の脳保護方法の変革、大動脈瘤に対するステントグラフト治療の普及などがそれにあたります。小さな手術である下肢静脈瘤の手術でも、低濃度大量局所麻酔法、硬化剤による硬化療法の適応拡大、ストリッピング部位を限定する選択的ストリッピング法などの登場で、大きく様変わりしました。これらは全て、完成形ではなく、いまだ発展途上の段階であります。大きな進歩以外でも、テクニック上の小さな工夫改良については、学会が開催される度に発見がある状況です。このように比較的短い期間のうちにパラダイムシフトが起こるため、今から10年後15年後には全く違う状況におかれている可能性があるのが我々の分野の特徴です。現在行なっている手法を替えた方が良い可能性がある一方で、目新しい手法が正しいとも限らないのもまた事実で、慎重な判断が要求されていると考えています。そのため、医学のどの分野でもそうだと思いますが、生涯研究と学習をし続けて、日々最適な方向へと進化し続ける必要があることを常に意識し診療を行なっています。

当科の役割としては、当院に多い糖尿病及び慢性腎不全や維持透析の患者さんの心血管病変への対応に加え、今後は救急医療の拡充に伴う心血管緊急ならびに外傷への対応がさらに求められると考えています。今後とも地域の医療施設の皆さまと連携の上、そのニーズに答えることができるよう努力していく所存ですので、御支援のほどを宜しくお願い申し上げます。

マンモグラフィについて

放射線科 部長 真下 伸一
放射線科 技師 宮本 宏実
片桐 江美子



現在 日本人女性の乳がん発症率は約20人に1人とされています。アメリカ人女性の乳がん発症率は約8人に1人。そしてアメリカ人の乳がん健診の受診率は72.5%です。その高い受診率により、米国では乳がんにかかる率は上昇しているにもかかわらず、死亡率は減少しています。それに対して日本はわずか13%しか受診率がありません。(名古屋市の受診率はたったの9.3%) そのため発見が遅れて、年間1万人を超える方々が乳がんによって亡くなっています。クリントン前大統領も乳癌早期発見のためにマンモグラフィ検診の必要性について言及しました。米国では1990年以降、乳癌による死亡率が減少していますが、これはマンモグラフィの普及による早期発見が大きく寄与しています。

マンモグラフィは通常、乳房を縦斜めに平らに伸ばして圧迫板に挟んだ状態で横から撮影する方法と、上下に圧迫して上から写す方法の2方向撮影します。撮影の際、ギュッと圧迫することで乳房の厚みが薄く伸ばされ、診断に有効な画像が得られ、被ばく線量も軽減できるのです。しかしこの圧迫により、“マンモグラフィは痛い”というイメージが強くあるようですが、痛みは乳房の形、大きさ、張り具合等によって個人差があります。ただ、生理前のように乳房が張る時期は避けたほうが痛みの軽減につながります。(生理前であっても画像上、影響があるわけではありません) あと、よく受ける質問の1つに“胸が小さいですが大丈夫ですか?”とありますが、大きさは撮影には関係ありません。

当院はマンモグラフィ精度管理中央委員会より認定を受けた施設で、検査には女性技師が必ず対応しています。装置は日立社製のLORAD M-IV という日本医学放射線学会の定める使用基準に適合した機種を使用しております。このLORAD M-IVという装置ではHTCグリッドを用いております。HTCグリッドというのは従来のグリッドと異なり、インナースペースがない自己支持型クロスグリッドであり、クロス構造にすることによりあらゆる方向の散乱線を除去し、さらにインナースペースをなくすことにより、直線性の感度が上がり、被ばくを増やすことなく高コントラストの画像を得ることができます。また、院内では毎週外科医師(複数のマンモグラフィ読影認定医がいます。)と放射線科技師との検討会を行い技術の向上に努めています。

乳癌にかかる女性の数は年々増加しており、平成12年にはとうとう胃癌を抜いて女性の癌発生率第1位になってしまいました。これは医療に携わる人も含めてまだ認識が低いことに原因があると思われます。40代以上の方すべてにたいしてしこりがないか注意していただき、あつたら“よい検査があるよ”とお勧めいただきたいと思ひます。



連携室だより

平成21年度 中部ろうさい病院病診連携システム 運営協議会連携セミナー

～ ご報告 ～

病診連携の円滑な運営を図るため、平成22年2月6日(土)にローズコートホテルにて中部ろうさい病院病診連携システム運営協議会、連携セミナーを開催いたしました。

あいにく朝からの雪模様でお足元の悪い中、多くの先生方にご出席いただきました。

また、運営協議会では、今年度より従来の港区、熱田区に加え、中川区、南区の医師会の代表の先生方を委員としてお招きして、多くの貴重なご意見を賜りました。

連携セミナーでは、消化器科より「当院における消化器内視鏡検査の現状」、「当院における胆道系疾患の治療の現状」をテーマとしてとりあげました。

今後も、登録医の先生方のお役に立てるようなテーマでのセミナーを企画していきたいと考えています。

運営協議会、セミナー終了後には、登録医の先生方との親睦を深めるため、意見交換会をおこない、約2時間にわたり有意義な時間を過ごさせていただきました。

ご多忙の中出席いただきました先生方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

平成22年度も地域医療連携室を通して、地域の先生方と連携を密にした、紹介、逆紹介の推進に努めていきたいと考えていますので今後ともよろしく願いいたします。

医師交代

☆辞職 (平成22年1月31日付)

眼科医師 新城 るみ子

産婦人科医師 新藤 和代

☆採用 (平成22年2月1日付)

リウマチ・膠原病科部長 藤田 芳郎

リウマチ・膠原病科医師 土師 陽一郎

☎地域医療連携室 (平日8:15~19:30)

052-652-5950 (TEL)

052-652-5716 (FAX)

室長: 小林 建仁 (副院長)

佐野 隆久 (副院長)

事務担当: 今関 信夫・金井 久実